

2024年3月31日 久宝教会 イースター（復活日）礼拝メッセージ

「走って行った」

水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 28章 1-10 節

本日は、イエス・キリストの復活を記念して祝うイースターです。私たちそれぞれにも、身近で大事な方を亡くされたりとか、そういう出来事がおありだったりすることだろうと思うわけですが、今日は初めに一篇の詩をお読みしたいと思います。もともと作者不明の英語の詩とされていましたが、これを作家の新井満さんという方が「千の風になって」と題した日本語訳で、さらには曲などもつけたりして、今からちょうど20年ほど前に、紹介というか発表され、大変有名となったものです。歌手の秋川雅史さんが紅白歌合戦でも歌ったりされていまして、秋川雅史さんバージョンが一番有名かもしれません。この詩はもともと、親しい人の死やその追悼の際に読み継がれてきたもののようで、例えば、2001年の9・11、アメリカにおける同時多発テロで父親を亡くした11歳の少女が、1周忌にこの詩を朗読したのだそうです。また、IRA という、アイルランド共和国軍のことですが、北アイルランドをイギリスから奪還しようとするカトリック系の反英国組織のことです。かつてそのIRAのテロによって命を落とした24歳の青年がおりました。テロを起こした側であったのか、テロに巻き込まれた側であったのかは分かりませんが、とにかくその青年が、「私が死んだ時に開封して下さい」と両親に託した手紙の中にも、この詩が入っていたといいます。そして、新井満さんがこの「千の風になって」という日本語訳の詩を作ったのも、親しい友人の妻の死がきっかけとなっていたのだといいます。そしてこの詩は日本でも、阪神大震災の追悼の際に歌われたり、2014年の韓国におけるセウォル号沈没事故の追悼行事の場でも流されたりしているようです。では、新井満さんの訳された「千の風になって」をお読みします。

「千の風になって」

私のお墓の前で 泣かないでください

そこに私はいません 眠ってなんかいません

千の風に 千の風になって

あの大きな空を 吹きわたっています

秋には光になって 畑にふりそそぐ
冬はダイヤのように きらめく雪になる
朝は鳥になって あなたを目覚めさせる
夜は星になって あなたを見守る

私のお墓の前で 泣かないでください
そこに私はいません 死んでなんかいません
千の風に 千の風になって
あの大きな空を 吹きわたっています

千の風に 千の風になって
あの大きな空を 吹きわたっています

あの大きな空を 吹きわたっています

本日の聖書は、イエスが復活する、という箇所です。ナザレのイエスが十字架につけられて死に、埋葬されたのは金曜日で、その次の土曜日はユダヤ教では安息日でありました。安息日には、律法によって人々の行動には様々な制限が課せられていましたから、仕事をする事、料理も、火をおこすことも、ある程度以上離れた所に歩いていくことも禁じられていました。そして、死者といくら親しい間柄であったとしても、墓参りに行くことも禁じられていたわけです。そしてその安息日が終わって日曜日の明け方、マグダラのマリアともう一人のマリアが墓を見に行くとあります。

このマグダラのマリアという女性は、かつて自分に取り付いていた7つの悪霊をイエスによって追い払って救ってもらったと言われている女性です。それ以来彼女は、12人の弟子たちと同様、イエスにつき従っており、イエスが十字架にかけられた時も、遠くから見守っておりました。また、もう一人のマリアというのはマグダラのマリアと共に十字架を見守っていた、ヤコブとヨセフの母マリアのことです。

イエスの兄弟にもヤコブとヨセフがおりましたから、このマリアはイエスの母であったのではないとも考えられています。

この2人のマリアは、十字架だけではなく、イエスの埋葬の時にも立ち会っておりました。27:59-61には「ヨセフはイエスの遺体を受け取ると、きれいな亜麻布に包み、岩に掘った自分の新しい墓の中に納め、墓の入り口には大きな石を転がしておいて立ち去った。マグダラのマリアともう一人のマリアとはそこに残り、墓の方を向いて座っていた」とあります。自分の大事な人、尊敬する人が十字架にはりつけになって無残に殺されるのを目の当たりにし、彼女らの悲しみや絶望はどれほどのものだったことか。「墓の方を向いて座っていた」。イエスが死んだことを頭では分かっている、なかなか気持ちで受け入れることができず、イエスのそばから離れがたかったのでしょう。マグダラのマリアには、気が狂っているといっちは皆から遠ざけられていた自分を救ってくれたイエスとの思い出、また、イエスの母マリアには、イエスの誕生の予告から始まり、様々な不思議な出来事が思い出される我が子イエスと暮らしてきた多くの思い出。墓の前で座っている2人にとってイエスの思い出は、はらはらと流れ落ちる涙と共に、後から後からわきでてきたことでしょう。イエスがこんな自分をもあつたかく包み込みやさしく肯定し、大きく用いて下さったおかげで、せつかく与えられたいのちを生きる喜びを取り戻すことが出来たのに、イエスを失ってもうどうしていいか分からない。また死んだような人生に逆戻りしてしまいそうだ。それは私たち自身も、愛する人を失うという経験によって感じる同じ気持ちかもしれません。安息日が終わって墓を見に行った時も、2人の気持ちは相変わらず深く沈んでいたことでしょう。

しかしその時、天使が現れ驚くべきことを2人に告げるわけです。5-7節です。「天使は婦人たちに言った。『恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。「あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。」確かに、あなたがたに伝えました』」

そして次の8節には、それを聞いた婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急い

で墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った、とあります。マルコによる福音書では、女たちは恐ろしくて誰にも何も言わなかったとだけしか書いてありません。まあどちらが本当かは分からないものの、恐ろしくて誰にも何も言わなかったと報告しているマルコの方がより史実には近いのではないかとされています。では、この話は全くうそなのか。そうではない。この女性たちは、この世のものではない存在に出会ったことで非常に恐れたのは確かでしょう。けれども、しかし彼女たちは天使に促されて見たのです。イエスの墓が空っぽなのを。彼女たちは天使からの伝言により、かつてのイエスの言葉を思い出したはずなのです。「しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」という言葉を。ガリラヤとは、イエスが初めて宣教の歩みを始めた地でありました。「異邦人の地ガリラヤ、あそこから何か良いものが出るであろうか」と蔑まれたところでありました。イエス・キリストが、イエスを見捨ててつまづいた弟子たちや、イエスを遠くから見守ることしかできなかった女性たちと再びそのガリラヤに集まるということは、彼らの罪にもかかわらず、もう一度新しい一歩を一緒に踏み出していこうというイエスの許しを伴った招きであったわけです。だから、私たちも日々いろんなことで悩んだり失敗したりして自己嫌悪に陥ることも多々あるかもしれませんが、きっとそれでもいいんです。私たちなんて、イエスの弟子たち以上にいろいろとつまづきやすい弱い者である、そんなことはキリストにはとっくに分かっていることなんです。そんなことは重々承知の上でイエスは、ガリラヤに先に行って弟子たちやマリアたち、そして私たちのことを待ってくださっているのです。

今日マリアたちが目撃した空っぽの墓穴からは、イエスの「私の墓の前で泣かないで下さい。そこに私はいません。眠ってなんかいません。死んでなんかいません」という声が聞こえてきたように感じられたのかもしれませんが。そしてマリアたちはきっと、イエスが生きてガリラヤで自分たちを待っておられるということに大きな希望と喜びを感じ、体に力がわき出てきたからこそ、自然と走り出したのかもしれませんが。そして案の定、彼女たちは復活のイエスと感激の再会をし、イエスから直接伝言をことづかって送りだされるのです。「恐れることはない。行ってきなさい」と。私たちも、このイエスの復活を目撃した女性たちのように、イエスの復活という希望と喜びの知らせを携えて風のように走り出す者になりたい、と思います。